

学会賞

高橋知之氏の著書『ロシア近代文学の青春』に学会賞

ヨコタ村上孝之

本年度のロシア文学学会学会賞は、論文については対象作なし、著書については高橋知之氏の著書『ロシア近代文学の青春——反省と直接性のあいだで』（東京大学出版会、2019年6月）に授与することが決定した。

本年度の学会賞の選考についてはまず2019年12月末を締め切りに一般会員より推薦を募ったが、寄せられなかった。そののち2020年3月末を締め切りに、学会賞選考委員に推薦を要請し、その結果、論文については候補作なし、著書については高橋氏の著書が挙げられた。今年はコロナ禍のため、例年六月に開催していた委員会を開くことができず、そのかわりに委員がこの推薦について慎重なメール審議を重ね、標記の結論に達した。以下、その議論の内容をもとに、ヨコタ村上の文責で本年度の選評を行う。

論文については、『ロシア語ロシア文学研究』第51号掲載の、宮崎衣澄会員著「大阪ハリストス正教会のイコノスタス」を推す声もかなり出たが、宮崎氏はすでに2010年度に論文部門で受賞しており、規約上、見送られた。氏が将来、論文を著書にまとめて、著書部門で学会賞を取られることを期待する。

著書部門では、高橋知之氏の『ロシア近代文学の青春——反省と直接性のあいだで』が推された。高橋氏の著書は、思想上の意味はあっても、創作の面ではおおむね不毛であったと普通、考えられている「驚くべき四〇年代」が、ロシア文学史において実は豊かな時代であったことを明らかにし、また、そのことを通じて、従来の文学史のさまざまな概念装置の読み替えを図っている。日本にお

けるロシア文学研究において、ドミナントなジャンルが詩から散文へと移行した1840年代のロシアの文学状況に関して、本作のように広い視座から全体的な見通しを与えようとする研究は、少なくともここ二、三〇年のスパンでみた場合、皆無である。その上、本作で中心的に採り上げられるのは、アレクセイ・プレシチュエーフとアポロン・グリゴリエフといった「マイナー」な作家たちであり、本作が、そうした作家たちの存在感を示し得ていること、また、単にあまり顧みられてこなかった作家に光をあてることを目的とするのみならず、彼らの営為を読み解くことを通して、「反省と直接性」という観念を軸にして、1840年代の文学史的・思想史的布置を照射し、従来の、たとえば「西欧派／スラブ派」といった枠組みではないかたちで、文学史・思想史を組み替える可能性を示すことに成功している。

さらに特記すべき点として、本著が欧米のロシア文学研究の最新の成果をふんだんに取り入れていることも挙げられる。われわれのロシア文学研究が世界のロシア文学研究と切り結んでいることを感じさせるものであり、今後の日本のロシア文学研究にとって意義は大きい。

他方、高橋氏は「世界」とだけではなく、「日本」のロシア文学研究にも新たな切り込みを示している。ここで含意されているのは、日本における、思想家や文芸評論家などによる、ロシア文学研究活動である。小林秀雄、唐木順三、森有正、河上徹太郎など、多くの日本の知識人がロシア文学について重要な発言をしてきた。しかし、それらは、ロシア文学研究プロッパの研究成果とは、必ずしも交わってはいなかった。高橋氏は、第二部第二章では九鬼周造に準拠してグリゴリエフの思想を論じ、また結論では小林秀雄とグリゴリエフの親縁性を詳細に検証している。このほかにも、本文各所に、「日本」のドストエフスキー研究の成果が幅広く取り込まれている。高橋氏の仕事は、内と外の二方向にネットワークを広げているのであり、その文化的・学問的意義は大きいといえよう。

以上の理由で、本書は学会賞に値する優れた業績であると判断する。同著は四百頁近い大著で、幅広い資料渉獵と丁寧な作品の読みを繰り返したものであると同時に、独創的な切り口をも数多く示し、また日本のロシア文学研究の可能性も開示する優れた研究であるといえよう。

高橋氏は2017年には『ロシア語ロシア文学研究』第48号掲載の論文「反省と漂泊：アポロン・グリゴリエフの初期散文作品について」ですでに学会賞を受賞されている。今回の受賞作は、この論文の内容をさらに深めた内容も含む業績であり、今後もこのような形で、論文から著書へと、若い研究者たちが充実した研究を発展させ続けていくことを期待するものである。

(よこたむらかみ たかゆき)